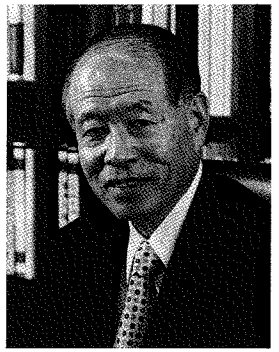
開会の辞

平成14年度日本化学会会長
創立125周年記念事業特別委員会委員長
野　依　良　治



本日ここに、天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、日本化学会創立125周年の記念式典を挙行いたすことができますことは、本会の誠に光栄とするところであり、会員一同喜びに耐えないところであります。

日本化学会は、わが国で有数の歴史をもつ学会であります。明治11年、東京大学設立の翌年、東京大学理学部化学科の有志、在校生など25名を中心に結成されました。その後、わが国化学の著しい発展とともに拡大し、昭和23年には工学部や産業界を中心に結成されていた工業化学会と合同し、今日の隆盛をみるに至っております。現在の会員総数は35,000人余を数えております。

省みますれば、わが国における化学の発展は、明治維新以降の西洋文明の吸収にはじまり、先人達のあくなき知的探求心と、不十分な環境をものともしない強靱な意志に支えられてきたものであります。わが国が江戸幕末から明治にかけて、物質の性質の究極を司る元素という概念を受け入れ、基本単位としての原子を理解していく過程は、このホテルの一角に展示され、後ほど両陛下にもご高覧賜る予定の史料にみることができます。

その後、徐々にわが国から独自性ある研究者が現われ、現在振り返りましても、当時の世界水準に比すべきいくつかの注目すべき業績が挙げられるようになってまいりました。20世紀の半ば以降は、私たち世代が時代を担うことになりました。政府を中心として産業界からも強力かつ継続的な援助をいただき、優れた先生方のご指導とともに、ヨーロッパ、アメリカ、そしてアジア各国の多くの化学者たちの温かい友情と助力にも恵まれて活発に研究活動を行うことができ、今日に至っております。今回の機会にこのような先駆者たちの足跡に敬意と感謝を表わし、また若い世代さらに海外の方々にも、わが国の研究業績をご周知いただくべく、記念行事の一環として英文史を発行いたしました。

さて、現代社会は、地球上の人口爆発とともに主として急激なグローバル化と技術革新による価値観の変化・多様性のはざまで、多くの矛盾を内蔵した複雑な時代に遭遇しております。私たちが学ぶ化学は単に自然を観察し理解するだけでなく、無から有を生む創造の科学でもあります。私たちは化学者あるいは化学技術者として、21世紀の新たな価値の発見と構築にむけてより積極的に行動すべきであり、そのために一人ひとりが、その責任を自覚して努力を続ける必要があると考えております。

今日、化学の分野において日本人の手になる研究報告は、世界全体の約20%を占めております。このことからも現在国際水準において、化学がわが国の最も競争力をもつ分野の一つであることは明白であります。しかし、私たちが問われていることは、自然科学全体における化学自身の力量であり、また、経済をはじめとする社会における化学産業の影響力、さらに人類の生存にむけての貢献度であります。わが国は科学技術創造立国を標榜していますが、科学と社会のかかわりは時代の宿命といえます。私たちは学術のみならず、さまざまな社会的課題、さらに環境を含む地球規模の諸問題の解決にむけても中核的な役割を果たしていかなければなりません。

科学研究の創造性は究極的には個人に帰属します。しかし、優れた科学技術や産業技術をつくるには、多くの研究者の連携による知識集約的作業が不可欠であります。日本化学会は、教育と研究の両面から個人の創造性を育み、そしてその研究成果が社会的に大きな波及効果を生むための場を提供すべきであります。日本化学会は、このたび創立125周年を迎えることができましたが、先人達が築かれた伝統に安住することなく、これを機会に新しい時代にむけた変革を加速し、さらに国の内外の負託に積極的に応えてまいりたいと思っております。

最後に、本日ご列席賜りました、国内国外からのご来賓の皆様に心から御礼申し上げるとともに、今後とも日本化学会の発展のために、ご鞭撻とご支援を賜りますよう、お願い申し上げてご挨拶といたします。